

《研究ノート》

対人援助職教育における海外の福祉施設体験学習の意義と課題 －基本的態度やコミュニケーションスキルと社会的視点に関する学習－

中 村 裕 子・佐 野 友 泰・大 宮 秀 淑

札幌学院大学

要 旨

本研究は、海外の福祉施設体験学習による、教育効果を検証することを目的とした。対人援助職の基盤となる態度やコミュニケーションスキル、社会的視点の醸成に寄与する効果があるのかについて検討を行った。体験学習に参加した12名を対象として、インタビュー調査を行い、SCATによる質的分析を行った。結果、海外で違う文化や国民性を感じるうちに認知的枠組みの見直しが起こり、省察が促進されて、受容的態度やコミュニケーションスキルの向上、社会的視点の獲得につながっていた。さらに、学習や活動へのモチベーションが向上し、精神状態の安定につながるといった、学習のレディネスが高まるという効果が示された。

キーワード：公認心理師・ソーシャルワーカー・海外研修・教育

I はじめに

1. 研究の背景と目的

対人援助職の学習では知識を得ることだけでなく、それを身につけ、表現できるというレベルの修得が必要である。それは臨床現場での「実践力」となり、専門職教育においては目標とすべきものである。Combs・Avila・Purkey（1978）が対人援助職について「思考し、問題解決していく人間でなければならない」と指摘し、「道具としての自己」を磨く必要性を述べるように、心理職や福祉職といった対人援助職の実践は、自己を道具として専門的な態度やコミュニケーションスキルを表現することで行われるため、対人援助職となるには自己研鑽が求められる¹⁾。必要な自己研鑽としては、態度やコミュニケーションの基盤となる、他者を理解するための想像スキルや行動観察スキルといった対人認知に係る能力を向上させることが考えられる。さらに、他者を理解するためには自己覚知も欠かせないことが指摘されている（結城2013）。自己の認知の歪み方や対人関係の課題などについて自覚的でなければ、他者に対する認知が歪んでしまい、援助関係に深刻な影響を与えてしまう。従って、実践力のある対人援助職となるためには、表現

するための自己を研鑽しておく必要があるが、その方法については十分に検討がなされていないと考えられる。

公認心理師が2015年に国家資格として定められたが、カリキュラムが作られてからの歴史が浅く、日本心理学会（日本心理学会2018）から示された標準シラバスを見ても備えるべき知識や技術に係る学習については配置されているが、それを表現する自己をどのように訓練するかについては、示されていない。実習の中では、クライアントに対して心理師としての態度やコミュニケーションといった表現が求められるが、そのための十分な資質を元来持っていなければならず、実習で求められるレベルにない学生はクライアントとのかかわりに困難が生じることが予想される。

また、福祉職である社会福祉士や精神保健福祉士についても、「学んだことを統合させて実践する力をどう養成していくか」について2021年度から導入されるカリキュラムの検討において議論されたことから（白澤・田村・岡田ほか2019）、実践力となる態度やコミュニケーションスキルを十分に醸成できていないものと考えられる。その結果、2021年度からの新カリキュラムにおいては、実習や演習の時間数や経験する実習施設の増加によって、教育の充実が図られたが、柏木（2019）が「増やすことだけで実践力の向上につながるのか、筆者は懐疑的である」と指摘したように、単なる増加では学生や指導者、教員の能力や資質に依って成果が左右されることは変わらず、身につけられるような内容や方法について検討の余地が大きいように思われる。

これに対して、海外での体験学習は異文化を体験することにより、当たり前だと思っていたことを自分の体験の中で見直し、認識の枠組みについて考察する機会になることが報告されている（坂本・富田1997）。このような機会は、自己の認識の枠組みを自覚させ、対人認知の正確性の改善となると考えられ、大学内での学習では得難いものになることが予測される。また、村田（2018）が海外での体験学習について「異文化への関心や多様性へ理解を深める貴重な機会である」と述べるように、文化や多様性といった社会的視点を醸成する効果があると考えられているため、これが社会的背景から人を理解する能力となり、想像スキルに寄与することが期待される。対人援助職は社会的視点からも他者を想像することが求められるため、このような効果は重要であると考えられる。

以上のことから、本稿では対人援助職の基盤となる態度やコミュニケーションスキルと社会的視点を醸成するための学習として、海外の体験学習の効果を検証し、対人援助職の教育課程に資する意義について考察したい。

2. 対人援助職の実践力醸成のために必要と考えられる技能

対人援助職で共通して求められる態度条件としては、共感性が広く認知されている（三國・本山・坂中2015）²⁾。また、共感を適切に相手へ伝えるには、態度とコミュニケーションスキルの両方を備える必要があることが指摘されている（澤田1998）。共感訓練の基礎となるものとして、

澤田（1998）は「他者の話の言外の意味を抽出する」想像スキルや「他者の行動を正確に予測する」行動観察スキルを挙げ、これらが対人専門職の態度を作るレディネスとなるとしている。つまり、対人援助職は言葉の背景にある意図や感情を、相手の表情や音声、態度といった非言語の要素や環境や状況などの背景となっている要素から必要な部分を統合して認知するが、さらに認知の正確性も求められることになる。こうした他者に対する認知で脳が参照する知識は、Turner（2000）が「脳の機能と文化、社会と対人関係の力とのあいだにおける相互作用によって形成される」と示したように、同じものは一つとして無く、そのような知識からの認知には偏りが必ず存在する³⁾。そのため、対人援助職としては、その偏りを自覚して調整した認知の正確性が必要となる。

また、対人認知で必要となる要素には文化や社会的背景があり、福祉職は生活や環境を支援することが専門であるため、重視されることは自明であるが、心理職にとっても、Engel（1977）が生物-心理-社会モデルとして提唱したように、社会的な要素は重要な視点となることが既に示されている。岩壁（2017）によると、生物-心理-社会モデルについて、医学のみならず心理援助領域にも共有された包括的治療モデルであり、①生物学的要因（遺伝、脳、精神科学、生物学）②心理学的要因（人格特性、発達、対人関係）、③社会的要因（文化、価値観、経済的要因）という多次元の視点から、アセスメント、治療計画、トリートメントを確定していく。トレーニングに目を転じれば、北アメリカの大学院訓練カリキュラムでは、大脳生理学や精神薬理学などの生物学的領域、文化やジェンダーなどの社会的領域を扱う科目が必修とされると述べられている（岩壁2017）。生物学的要因のトレーニングは、脳科学や生理学、精神医学・薬理学など、大学院の心理臨床家養成課程で必要とされてきた医学領域のトレーニングとオーバーラップするものであり、医療現場の実習で実践知の一端が習得可能であろう。また、心理学的要因のトレーニングは、臨床心理学をベースに重点が置かれてきた。

しかしながら、社会的要因の実践的知識は、従来の心理臨床家のトレーニングではやや弱い領域であろう。大学院で1人の大学院生が3、4ケースのカウンセリングを担当したとしても、文化や社会的背景に問題を抱えたクライアントを担当することが無ければ、実践的な知識は希薄なままである。ここに、トレーニングの場で文化や社会的背景に問題のあるクライアントと出会う現場に接することの必要性が生じよう。日本においてはプライバシーの観点から、トレーニングを受けているものが、文化や社会的背景に問題を抱えるクライアントを擁する現場において体験を積むことが難しい。従って、日本の学生が、海外において虐待を受けた子どもやHIVウィルスの保持児童と接する場を持つことは、上記の社会的要因の実践的な知識を得ることにつながると考えられる。

3. 本学におけるタイでの体験学習

次に、本学におけるタイでの体験学習の概要について述べる。本学の人文学部臨床心理学科では、公認心理師や精神保健福祉士の課程を選択することができ、タイでの体験学習は3年次選択

履修科目の中に位置づけられている。スタディツアーとして実施しており、約1週間の実習期間である。目的としては、次の2点を掲げている。①精神病院の保護室の状態や孤児院の見学及び「スラム」での青少年の実態を知ることにより、心の臨床家としての見識を広げること、②親を失った「無国籍」の子どもたちと実際に触れあうことにより、様々な心理的問題を抱える子どもたちと接する際の心構えを醸成する、の2点である。具体的な実習内容としては、施設見学と現地職員からの講義で主に構成されている。施設見学の例としては、国立チェンマイ大学医学部附属病院や国立孤児院、スラム児童支援施設などがある。現地職員からの講義としては、チェンマイ大学医学部教員による「タイにおける心理療法の実際」や「スラム児童支援施設スタッフによるスラム街における児童買春の現状と課題」などがある。

Ⅱ. 研究デザイン

1. 調査協力者

タイにおける体験学習に参加した学部学生12名(男性2名,女性10名)

2. 調査の概要

インタビュー調査により、海外の福祉施設の体験学習の効果検証を行った。

体験学習は2018年9月と2019年9月に、タイの孤児院2か所とスラム児童支援施設、国立大学付属病院精神科を視察し、年齢が20代から30代の学生12名と教員3名が参加した。

体験学習後に参加した学生を対象に1時間程度の半構造化インタビューを行い、インタビュー項目は、体験学習の印象、体験学習後の対人関係に関する変化、将来への影響とした。インタビュー内容については、対象者の了承を得てICレコーダーに録音し、逐語録を作成した。

3. 倫理的配慮

倫理的配慮として、個人のプライバシーは保護されること、調査協力は自由意志であり、辞退しても不利益を被らないことを文書と口頭で説明し、同意される方のみ研究に参加するという形式で行った。また、札幌学院大学大学院臨床心理学研究科倫理審査委員会へ本研究の実施について申請し、承認を得た(臨1803号)。

4. 分析方法

分析には、大谷(2007)の質的データ分析SCAT(Steps for Coding and Theorization)を用いた。SCATは、4段階のコーディングとして、①データの中の着目すべき語句の記入、②データの中の語句の言いかえの記入、③②を説明するようなデータ外の概念の記入、④テーマ・構成概念の記入を行ったうえで、これらをつなぎ合わせたストーリーラインを作り、そこから知見や理論を

導き出す手法である。小規模なデータの分析に適しており、分析の過程が明示的であるため、恣意性を極力排除して客観性を高めることが可能であるとされる。

本研究では、インタビューで得られた逐語録をコーディングし、ストーリーラインを作成した。客観性を高めるために、3名の研究者でコーディングしたものを確認しながら、分析を行った。コーディングしたものを分類し、大別された個々の概念をカテゴリー、サブ・カテゴリー、概念の三つに分類し結果を導いた。

Ⅲ. 結果

12名のデータからコーディングを行い、ストーリーラインと理論記述を行った。（表1, 2）分析の結果、表3に示した20の概念と9のサブ・カテゴリーが生成され、「認知的枠組みの見直し」、「共感的態度やコミュニケーションスキルの形成」、「社会的視点の獲得」、「レディネスの向上」の4つのカテゴリーに集約させた。以下、カテゴリーを【 】, サブ・カテゴリーを〔 〕, 概念を〈 〉で示す。そのうえで、図1に示した全体のストーリーラインを生成した。

1. 認知的枠組みの見直し

【認知的枠組みの見直し】は、体験した出来事によって生じられたものにより〔環境や国民性の差異の体験〕、〔自分の行動や思考の見直し〕の2つのサブ・カテゴリーで構成された。

〔環境や国民性の差異の体験〕では、観察したものや体験したことを日本と比較し、社会や文化、環境についての特徴を捉えようとした〈日本との差異を感じる体験〉が示された。また、自分の言語の通じない相手とのコミュニケーションを体験し、態度や行動からでも相手の意図を汲み取らなければならない〈非言語コミュニケーションの体験〉が起っていた。それらの体験から、知識として持っていたものを実感したり、違いに気づいたりするという〈体験による実感〉が生じていた。

〔自分の行動や思考の見直し〕では、タイに対する理解が進む一方で、日本で当たり前として自分が感じていた環境や文化、慣習などが当たり前ではなく、自分が無意識に持っていた日本人としての常識だったということに気づく、自分の中の〈日本人としての認知的枠組みの浮上〉が見いだされた。また、物ごとに対峙する際の思考傾向としての〈認知傾向に係る気づき〉が示され、これまでの自分が不安や焦りといった不安定な精神状態に影響された認知傾向であったと省察されていた。加えて、これまでの他者との交流の際の認知に係る省察として〈他者認知に係る気づき〉が生じていた。自分の価値観で相手を判断し、相手の立場や意図を想像していなかったり、ネガティブな態度で接していたりしたことが語られていた。

図1
態度やスキルの醸成のストーリーライン

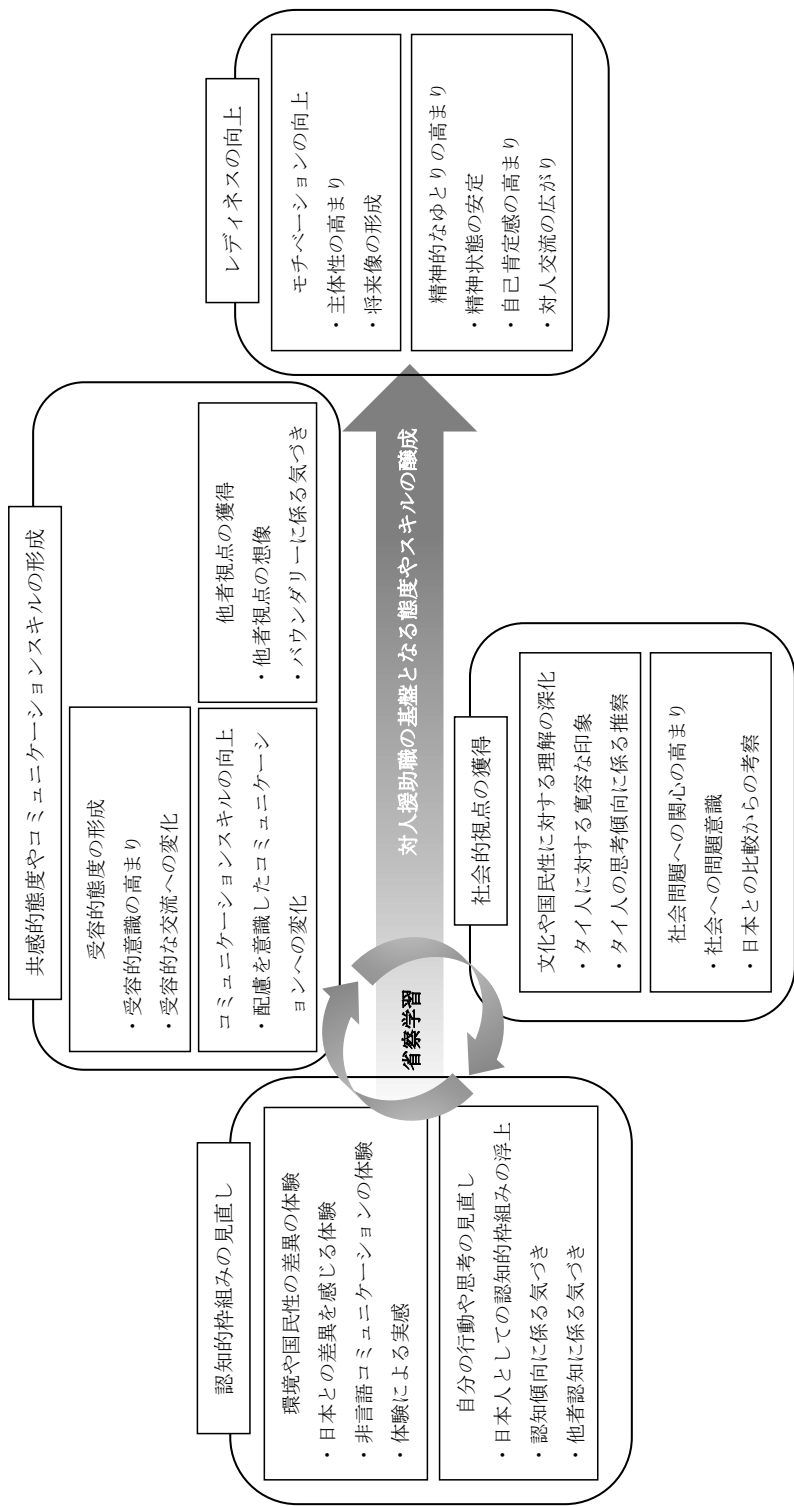


表1 学習のストーリーライン

調査協力者	ストーリーライン
A	調査協力者Aは、タイで日本とはまるで違う大変な境遇の人々がいることを知り、そのような立場に立たされたときにどのような心境になるのか、考えさせられた。実際に行ってみると、自分の想像とは違うものもあり、実際に行く方が知見が広がったと感じた。自分には不安が先行する傾向があり、この体験学習でも不安が高かったが、実際に行ってみると案外大丈夫だと感じて、自分の自信になった。そこから、ゆとりを持つことを心がければ自分ではできないかと思えるようになった。
B	調査協力者Bは、タイで日本では見られない光景や違う文化を知り、交流の中で、タイの人々に対して「優しい」や「温かい」という印象を抱いた。言葉が通じないため、身振りや行動、表情から読み取る必要があったが、相手が積極的に向き合ってくれていると感じ、言葉が通じないからこそ感じるものがあつたと思った。そこから、相手の意図や裏側を考えて、読み取るように自分が変化した。さらに、相手の意図や気持ちを考えるようになると、分からないと感じていた人に対しても理解ができるように感じられるようになった。異文化を体験する中で、国籍がない人やタイの精神科医療を見て、社会の不平等や人権について考えずにはいられなかった。日本では宗教に対する印象が良くなかったが、タイの人々との交流や生活を見る中で、人の精神に影響するものだと感じて、異文化や歴史、人の生活スタイルに対する考え方が広がった。このような体験の中で生じた視点や考え方が対人援助職に就くときに生かされると感じた。
C	調査協力者Cは、タイについて穏やかな印象を受け、同時に日本は不寛容だと感じた。自分も細かく厳しく規則やマナーを守ることを自他に要求する傾向があったが、タイの人々からの影響を受けて許容範囲を広げてもいいと考えるようになった。他者へ要求しなくてもいいことに気付いたことから、自分と他者を分けて考えるように意識することにつながり、イラつきを感じなくなった。さらに自分が心配性な思考傾向があると気づき、心配な気持ちを引きずらずに区切りをつけるように思考を変化させた。すると、心に余裕ができて、以前は拒否していた人とも交流できるようになった。先入観に左右されずに、苦手だと感じる人を避けなくてもよい心境になり、会話に広がりを持てるようになった。
D	調査協力者Dは、タイに「ゆるい」という印象を持ち、「頑張らなければならない」と感じさせる日本に嫌悪感を感じる一方で、タイには好印象を抱いた。その日本の価値観を自分も持っており、日本人としての価値観で物事を判断して、他者に行動を要求していたことを省察した。そこから、他者の行動に対して厳しく批判する思考が低減され、許容できるように心境が変化した。結果、関係性が改善され、交流の幅に広がりができた。タイ人のゆるさを見習い、適度なペースで行動する方がストレスが軽減され、継続していけると実感した。
E	調査協力者Eは、無国籍の子どもの存在を知り、社会問題への関心が高まり、当事者の心境や社会としての対応などを考察した。タイでは、日本で当たり前だと思っていたことが違うことが分かり、自分の常識が他国では適用しないことを実感した。タイ人に対して、友好的で適当な印象を持ち、それがタイの社会環境にも影響があると感じた。対人交流においても積極的に自分からかわろうとする気持ちが高まった。タイ人との交流で、様々な視点から考えたり、相手の性格や行動に自分が合わせることで関係性を良くすることではないかと感じて、そういった考えで交流するように変化した。タイで行動できる自分を感じたり、行動すれば物事を変えられると感じ、自信が持てるようになり、チャレンジしてみようというモチベーションが高まった。

F 調査協力者Fは、タイ人に対して親切でゆるやか、友好的な印象を持ち、日本との国民性の違いを感じた。そういった国民性が差別的な考えを少なくさせているのではないかと考え、日本人はタイとは逆のルールへの厳しさがあるために差別的な意識を生みやすいのではないかと推察した。自分の常識が世界に通じるものではないことを実感し、日本人としての常識を持っていることを自覚した。そこから、自分の常識で他者を批判していたことを省察し、他者の常識に配慮した対応の必要性を感じた。そういった対人関係の変化から、対人援助職においては相手の考えと自分の考えを合わせて考えることが必要だと感じた。体験学習によって、他国と文化や環境、生活様式の違いを実感できた。

G 調査協力者Gは、非言語コミュニケーションを通じて、タイ人のやさしさに触れ、動作や行動でも交流ができることに気づいた。相手の様子から察しようとする意識が芽生えたと、理解しづらい相手への拒否的な過去の態度を省察し、自分から察して対応してみようという気持ちへ変化した。そこで、想定していたよりも行動できる自分に気づき、自己肯定感の向上につながった。

H 調査協力者Hは、タイの社会が抱える問題や環境について、日本とは違う歴史から生じているものだと捉えた。交流を通して、タイ人に対しては、頑張ることを強制されず、大雑把で良く、人に寛容な傾向があるという印象を受けた。さらに、自分とは違うと感じるタイプの人に対して身構える傾向に気づき、それは自分の尺度で相手を評価していたからだと省察した。そこから、違うと感じるタイプの人に対しても受容的に話を聞けるようになり、交流ができるようになった。そういった体験から、大学の座学では得られない深い理解が得られたと感じた。

I 調査協力者Iは、タイと日本の対人援助職を比較して考察し、中途半端さがなく現実に即したタイの援助方針が良いものであると感じた。一方で、日本の援助は中途半端な正義感で行われているという印象があり、否定的な意識が高まった。そこから、自分が将来対人援助職をする際には自分のできる範囲を意識した現実的な実践をすべきだという考えになった。タイの制度に縛られない多様な実践を学び、自分もそのような援助をしたいという将来像を得た。

J 調査協力者Jはタイでの子どもとの非言語コミュニケーションによる交流を通して、感情に対する配慮の必要性について気がついた。そういった学びは、大学の座学で学べることは違うものだと感じた。

K 調査協力者Kは、日本と比較してタイの文化や社会の違いについて考察し、驚きを感じた。日本の環境は恵まれていると感じ、物が豊富にあることが当たり前ではないということに気づいた。タイの人との交流を通して、日本の国民性はタイと比較してきっちりとしているという印象を持ち、自分もそのような認識枠組みを持っていることを感じた。そういった認識枠組みが自分を焦らせ、他者へもそれを要求していたと省察した。タイ人は緩やかなペースで余裕のある態度であると感じ、それが柔軟に行動できることにつながっているのだと考察した。それに倣って、きっちりすることを相手に要求せずに、柔軟に相手に合わせて対応してもよいという考えに変化した。他者は自分の思うとおりにならないことを受け入れ、相手に合わせてやり方を変えるように自分が変化した。一方で、日本にはない大変な境遇に置かれている人々の問題を見て、自分に何かできることはないかと関心が高まった。対人援助職の援助方針では、国の文化や価値観による違いによって、実践が変わることを考察した。

L 調査協力者Lは、タイの子どもとの交流を通して、相手の感情を態度から察し、子どもはみんな素直だと感じた。体験前は子どもとかわるることについて緊張感を感じていたが、子どもに対する認識が変化したので、それが低減されて、楽になった。自分の心境が変化すると、他者の行動に対して、許容できる範囲が広がった感じが持てた。

表2 学習内容の理論記述

調査 協力者	理論記述
A	日本と差異のある環境や境遇の人々の観察からの知見の深まり。社会問題に対する関心の高まり。体験することの意義の実感。自分の傾向についての省察。認知傾向に関する気づき。体験を通して得た自己肯定感。安定した精神状態への変化。
B	非言語コミュニケーションによる相手の感情や意図の読み取り。タイ人に対して抱く印象。言葉の背景を考える時間の増加。意図や背景を探ろうとする思考への変化。タイの社会問題への接触。社会問題に対する関心の高まり。日本とは違う生活様式や国民性の観察。宗教に対する認識や物事に対する考え方の変化。思考や視点の広がり。将来就きたい対人援助職に必要な学習となる体験。
C	国民性の差異に関する考察。自他への許容の広がり。バウンダリーを意識する思考への変化。心配しすぎる自分の傾向に対する気づきと変化。社会問題への関心と日本との比較からの考察。援助者の態度の比較。対人交流に関する省察。仲の良い人に限定しない対人交流への変化。広がりを持つ会話へのコミュニケーション技術の向上。苦手だと感じる相手への拒否的な態度の低減。
D	国民性に関する日本との比較。ルールや仕事、行動に係る価値観の変化。ゆとりを作るようにする心がけへの変化。仕事のペースの加減を心がけることによって生じた心のゆとり。他者への批判的な思考の低減と受容的態度の形成。他者との関係性の良好な変化。適度なペースで行動することによるストレスの低減。
E	タイの社会の抱える問題に対する関心の高まり。日本人としての価値感覚や認知的枠組みを持つ自分に係る省察。日本との比較による環境や価値観、国民性に係る考察。消極的だった自分の行動傾向に対する内省と変化。自分は現実を変えられるという自己効力感の向上。コミュニケーションに対する積極的な態度への変化。多様な視点を持ち、他者の性格や傾向に配慮しようとする交流への変化。
F	国民性の違いに係る気づきとそれがもたらす差別意識への影響の考察。自分の中にある日本人としての価値観や認知の枠組みの自覚。自分の価値観に他者を合わせようとしていたことに対する省察。他者の立場に立った交流の必要性への気づき。理想とする対人援助職像の想像。相手に合わせ、一緒に考えることの重要性に関する考察。他国を体験することの意義の実感。
G	非言語コミュニケーションの体験によるコミュニケーション技術の向上。他者の態度や行動から察しようとする態度への変化。他者への拒否的な態度に係る省察。積極的に相手を理解しようとする思考への変化と交流の広がり。体験から得た自己肯定感の向上。
H	タイで起こっている社会問題にかかる考察。日本と比較して感じた国民性の違い。タイとの比較から生じた日本に対する批判的な考え。体験学習から得た深い気づき。自分と似ていない相手に対する拒否的な態度からの変容。受容的な意識の高まり。自分の尺度で相手を評価していたことに対する省察。
I	日本とタイの対人援助職に係る比較からの考察。理想とする援助観の形成。自分の将来像の想像。制度や国民性などの日本との比較による考察。日本の対人援助に対する否定的な意識の高まり。
J	非言語コミュニケーションの体験を通じた相手の感情を察することへの気づき。体験することの意義の実感。
K	文化や社会の差異に関する発見。日本人としての認識枠組みを持っているという自覚。自他に厳しさを要求し、自分を苦しめていたことの省察。落ち着きが持てる思考への変化。バウンダリーに係る意識の形成。受容的で柔軟な態度の形成。社会問題に対する関心の高まり。モチベーションの向上。タイの対人援助職の観察を通じた援助観の形成。タイ人の緩やかなペースや余裕のある態度の自己への取り入れ。
L	態度から感情を察する非言語コミュニケーションの体験。子どもに対する認識の変化。子どもとの交流に対する緊張感の低減。他者の行動に対する許容範囲の広がり。

表3 カテゴリー、サブ・カテゴリー、概念

カテゴリー	サブ・カテゴリー	概念	テキストからの引用 (アルファベット表記は調査協力者を表す)
認知的枠組みの見直し	環境や国民性の差異の体験	日本との差異を感じる体験	日本とはまるきり違う境遇、国籍がない難民、すごくいい体験というか自分の知見が広がった。(A) / タイの人がすごく優しかった。日本じゃ見れない光景をたくさん見れたり、違う文化を知ることができた。(B) / 衛生的には日本は豊か、恵まれている。(E) / 日本国内の施設だと、日本の制度の中で作って、それが軸になって、大体やることも同じ。タイなりの制度みたいなものがあるって、そこで展開されていることで色々違う。国が違うから、そもそも制度も違うし、国民性も違い、偏見といった部分とかも全然違う。(I) / 日本は先進国で、向こうは発展途上国。見た目も文化も考え方も生活の仕方でも社会の背景も全部違った。(J) / 自分は恵まれた環境に住んでる。物があることがすごい有り難い。(K)
		非言語コミュニケーションの体験	異国の言葉が通じないからこそ感じるものがあった。言葉が通じないからこそ積極的にその人に向き合おうとする。身振りだったり行動だったり表情だったり、そこから汲み取ろうとした。(B) / 言葉が通じなくても優しい。コミュニケーションは言葉だけじゃなくて、動作、行動などでもいい。(G)
		体験による実感	実際に行ってみると違うというか、自分の中で想像していたものとはまるきり違った部分もある。(A) / いろんな人がいるっていうのを、頭の中で理解しているのと、実際に体験するのは、別なように思っていて本当の意味で納得することができた。(H)
	自分の行動や思考の見直し	日本人としての認知的枠組みの浮上	異国の地の文化、歴史、人のスタイルとかそういう大きな刺激があったことが私の中の考え方が広がった (B) / 1 個 1 個日本と違うところを見たときに、おかしくないって全部に思う。日本人ルール守りすぎ。(D) / 普段当たり前って思っていることが、日本を出たら、それは日本だけであって、海外ではやっぱり違う。(E) / 自分の常識が世界に通じるものじゃないっていうことをすごく実感した。自分は当たり前だと思っていた。(F) / 日本はきっちりしている印象が今回凄く感じて。自分もそっちの日本人枠にはまっていたんだなっていうのが感じられた。(K)
		認知傾向に係る気づき	不安が先行していた。準備万端以上にならないと不安になる。(A) / 細かいこととか心配性気味でネガティブな思考になっちゃうことが多かった。(C) / 自分がきっちりし過ぎてた。自分で自分の首を絞めているみたいな感じがずっとあった。焦り過ぎてたみたいな感じ。(K)
		他者認知に係る気づき	行動の意図とか気持ちまでは考えてなかった。(B) / 自分の尺度で見えていた。自分とは違うタイプの人の話を聞いたときに身構えて聞いていた。(H) / 自分の中のルールに当てはまってないためって感じがあった。(K)
共感的態度やコミュニケーションスキルの形成	受容的態度の形成	受容的意識の高まり	分からないことが多くて、どうしてこうなんだろうなって、この人こういうことするんだらうなって不満に思ったりもするけど、考え方を1つ自分の中に取り入れられたっていうか、方法を知れた。(B) / 仕事に支障がなければある程度許してもいい。自分が心が広くなったとまではいかないけど、変わった。細かいことを気にしなくなった。認識が変わった。(C) / 力抜くようにしたから、まあいいんじゃないと思った。(D) / その人の人となりをもっと多分もっと当たり前に受け入れられるようになった。(H) / 考え方が少し柔軟になった。(K) / 許容範囲が広がった。過去の自分を振り返ったりすることもできた。(L)
		受容的な交流への変化	今は接する中で印象とか結構変わってくんで、固定観念なしで話ができる。タイに行って価値観の違いとか見てきて柔軟になった。(C) / 他人の意見も受け入れないと回っていかない。(F) / 自分とはまた全然違うようなタイプの人の話を、すごい当たり前に聞けるようになった。(H) / わざわざきっちりこれやってこれやってを相手にも要求しなくてもいいし、相手がもし自分の思った通りにできなかったら、自分がそれに合わせるのもあり。次のやり方を考えればいい。(K)
	コミュニケーションスキルの向上	配慮を意識したコミュニケーションへの変化	表情とか身振りとかそこから何かを読み取るっていうことがこの考え方からできる (B) / 他人の人の関係を深めるような関わりができるようになった。前は固すぎて、そこでスッと終わる感じだったのがもうちょっと広がって。固定観念がないとか、積極的に話しかけられるとかそういうのは大事だと思うので、前より良くなる。(C) / 段々慣れて、こういう感じで関わればいいんだと思った。この人はこうなんだ、こっちはこうだ、この人とはあんまり合わなさそうだ、そういうのを考える。(E) / 察するっていう感じのことはできるようになった (G)
		他者視点の想像	何か意味があるんじゃないかと裏側を考えてみる時間が増えたような感じ。(B) / こういふ観点で見てるのかなあととか、色々、いろんな方向から見ると、その人たちの関係性を成り立たせるので重要。(E) / こっちの人の常識がある。対等な関係で、相手のことを思って発言、行動しないとイケない。(F) / 一緒に分かって考えるように、自分も分かってみたいになった。(G) / ポジティブな感情になれないっていうのはそういう理由がちゃんとあって、だからそれを考慮してかかかわらないといけないって感じた。(J)
	他者視点の獲得	バウンダリーに係る気づき	自分は自分、他人は他人みたいにそこを分けて考えられるようになった。(C) / 自分の思い通りにいかないこともあるのは当然。(K)

社会的視点の獲得	文化や国民性に対する理解の深化	タイ人に対する寛容な印象	すごい穏やか、大らかな感じ。日本はきっちりしてないと怒られる。日本だったら欲しがってる子とかいたらそれ貸してあげたらとかって大人の人が介入する。ゆるいというか朗らかな感じ。タイの雰囲気とかその人たちの生活見てこういう国なんだろうなっていう感じがな。(C) / タイのゆるい感じは割と好きだった。(D) / 日本人よりはタイの人ってフレンドリーで適当。(E) / 日本とは違う親切さ。ゆるやかな感じで、誰でもウェルカムだよ、みたいなほわーんってした感じ。差別がないっていうのはいいこと。(F) / すごい大雑把なかんじのところが、日本みたいに頑張って生きなくちゃいけない雰囲気がなくて、それがすごくいい。切り詰めてないような雰囲気を感ずる。寛容と言うか、厳しくない。(H) / のんびりしてて余裕があるから何でもいよいよって言える。(K)
		タイ人の思考傾向に推察	仏様っていう存在が自分の心のベースにある。心理とかやっていると宗教を切り離してるわけではないけど、どうなのかなって思っていた。宗教の力は人の心に大きく影響する。(B) / その人たちの生活は尊重して、その中で何かできることはないかって、やっている感じが、なんか偽善っぽくない感じがした。(I) / 里子に出すよりは血のつながりの方が大事っていう考えが強いんじゃないかって話で。日本は里子にださないで、親になんとか連れ戻すって考えが強くって、タイは子どもが幸せになれるんだったら迷わずに里子に出すっていう感覚。(K)
	社会問題への関心の高まり	社会への問題意識	自分がそういう立場に置かれてるってことを分かったときに、どういう心境に立たされるんだろうかっていうところがすごい考えさせられた。(A) / どうしてこんなに若くしてここでお店を開いているんだろうなって疑問。生まれ持った宿命を感じた。世の中って平等じゃない。(B) / 精神科病院に入った瞬間からなんだこってって思っ、すごく驚いた。患者さんのことを想像せずにいられない。人権的なことを考えると私はどうなのかなって疑問。(B)
		日本との比較からの考察	孤児院に行ったときに無国籍の話聞いて、全然違うなって思った。(C) / 日本と違う文化だった。国籍ある子とない子では、今は一緒でもこの先別れていく。タイのその国、政府が、どうやってそういう子たちに色々対処してくのかなあっていうのを考えさせられた。(E) / カッチリしてることによって、なんか差別とか生まれる。日本ってそういうのが絶えない。(F) / 日本と違う歴史をたどっているからこそ、そういう問題が起きている。(H) / 親のいない理由がやっぱりちょっと違った。エイズの母子感染だったりと。日本と違うところがあった。日本でいう心理的な虐待とかにはならないのかなと思ったけど、違った。親のために売春をやるってことが衝撃的だった。(K)
レディネスの向上	モチベーションの向上	主体性の高まり	色々チャレンジしようっていう気持ちは強くなった。今まではなんか気持ちで思っても行動に出さなかった。自分一人でも行動できるようになった。(E) / 相手に対して行動を起こすってことを、自分からやったのは、初めて。(G) / 何かできることはないのかなみたいな。(K)
		将来像の形成	人を助ける仕事に就きたいと思うけど、そのときにも役に立ちそうな視点とか考え方捉え方が自分の中に生まれ取り入れられた。(B) / 利用者さんとは対等な関係。私の常識を障害持ってる利用者さんに押し付けても何の意味もない。利用者さんの声も聞いて、私の考えも持ったうえで接していく。(F) / 自分の限界を知らながらも今できることをやっている。今後自分が働くんだったら、そういうのを感じながら、働いていかなきゃいけないのかっていうふうには思った。今後働くんだったらなんかそういう制度とかに縛られなきゃいけないけど、なるべく縛られないところに行きたい。私の意見でその人が進むんじゃなくて、その自分で考えて自分で責任を持って、その進路に進むなりっていうことをなんか考えた方がよい。(I) / 社会のルールにそって、自分はそこは柔軟に対応しよう。(K)
	精神的なゆとりの高まり	精神状態の安定	準備はそのままだけど心の中である程度ゆとりはできる。ゆとりがあった方が自分のストレスとかも色々関わってくるだろうし、ゆとりはできるだけ持っておいた方がいい。(A) / ある程度区切りつけてここまでできたらいいやとか諦めがつく、区切りをつけられるようになったのがいいところ。自分にちょっと高めめのハードルを課してたところが少しあったので、そこを緩やかにできたというか、心に余裕ができた。(C) / そんなに頑張らなくていいと思うようになった。ゆとりを作ろうにした。(D) / 余裕ができた。疲れない感じになった。適当にしたところに罪悪感がないようになった。程々の方がちゃんと継続的にいける。(D) / 何かしら慌てた時に落ち着こうというふうには思えるようにはなった。仕事とかでも、結構思えるようになってきて。イライラもしなくなってきた。(K) / 子どもに対してのその緊張感、ずっと前からあったものは薄まった。(L)
		自己肯定感の高まり	案外大丈夫だ (A) / 自分から動けば変わるんだっていうのは、タイ行って、わかった。(E) / 意外に自分、ちゃんとやれる、進められる。(G)
		対人交流の広がり	今は苦手だからやめとこうみたいなそこまで避けるようなことはなくなった感じ (C) / 今は割と仲良くできる。(D) / 自分から積極的に関わろうっていう気持ちは、行く前に比べたらやっぱり大きくなった。(E) / わかる範囲だったら、ちょっと対応みたいな感じにはできるようになった。(G)

2. 共感的態度やコミュニケーションスキルの形成

【共感的態度やコミュニケーションスキルの形成】では、体験学習で得られた対人援助職の基盤となる態度やコミュニケーションスキルに係るものにあたる〔受容的態度の形成〕、〔コミュニケーションスキルの向上〕、〔他者視点の獲得〕の3つのカテゴリーで構成された。

〔受容的態度の形成〕では、相手の考え方や行動を受け入れ、許容するような考え方である〈受容的意識の高まり〉が生じていたことが示された。自分とは違う考え方や行動に対して、柔軟性が高まり、許容範囲が広がっていた。それに応じて、自分とは異なる考え方や行動の相手を受け入れたり、合わせたりしながら会話や行動をする〈受容的な交流への変化〉が起こっていた。他者の意見や行動によって、自分が柔軟に変化をしてもよいとする考え方に変わっていた。

〔コミュニケーションスキルの向上〕では、相手の意図や感情を推察しながらかわる〈配慮を意識したコミュニケーションへの変化〉が起こり、コミュニケーションスキルを向上させていたことが示された。慮り、相手に合わせたコミュニケーションを図ろうとする変化が見いだされた。

〔他者視点の獲得〕では、相手の意図や感情を探ろうとする心の動きとしての〈他者視点の想像〉が起こっていたことが示された。自分の常識や視点で捉えるのではなく、相手の視点について想像し、感情を読み取ろうとする意識が高まり、かわりの中で実践されていた。そこから、他者の立場を想像する中で、自分とは違うという意識を持つべきという〈バウンダリーに係る気づき〉を得て、自分と違う他者を受け入れようとする意識となっていた。

3. 社会的視点の獲得

【社会的視点の獲得】では、人や環境を観察して得られた学びとして〔文化や国民性に対する理解の深化〕、〔社会問題への関心の高まり〕の2つのカテゴリーで構成された。

〔文化や国民性に対する理解の深化〕では、許容範囲が広く柔軟性が高いといった〈タイ人に対する寛容な印象〉を抱えていることが示された。交流の中で、タイの人々の行動や態度について「ゆるい」「朗らか」「親切」「大雑把」「寛容」「のんびり」といった寛容な印象を示す言葉が多く見られた。その特徴を捉える中で、比較対象となった日本人に対しては、逆に「きっちりしていないと怒られる」や「頑張って生きなくちゃいけない」という不寛容な印象が語られていた。そういったタイの人々の思考は、どのようなものから形作られているのかと〈タイ人の思考傾向に係る推察〉が起こり、観察したタイの文化や行動と結び付けて考えられていた。ここでも日本との比較から、タイへの肯定的な考えが見られた。

〔社会問題への関心の高まり〕では、タイの社会が抱える問題について、その立場に置かれた人々を想像して〈社会への問題意識〉を高めていたことが示された。日本よりも鮮明で目に見えやすい国籍の問題や貧困格差、人権といった対人援助に関わる問題への関心が見られた。それらは、歴史や文化や状況といった社会的背景が日本とは違うために生じているのではないかという〈日本との比較からの考察〉によって理解が深められていた。比較によって、タイ社会への批判的な

考察がある一方で、日本に対しても批判的な考えが生まれていた。

4. レディネスの向上

【レディネスの向上】では、対人援助職となるための学習の基盤となる自分の変化として〔モチベーションの向上〕,〔精神的なゆとりの高まり〕の2つのカテゴリーが構成された。

〔モチベーションの向上〕では、自分から行動を起こそうとし、物ごとに積極的に関与しようとする〈主体性の高まり〉が示され、意欲的な言葉が見いだされた。また、対人援助職に自分が就いた際のことを想像して、接し方や関係性の作り方、援助の方法などの理想を描く〈将来像の形成〉が見られた。援助観についての考察が深まり、対人援助職に就くことに対する意欲が見られた。

〔精神的なゆとりの高まり〕では、ゆとりをもって物ごとに対峙しようとする意識を持つことで焦りが軽減される〈精神状態の安定〉が示されていた。ゆとりを意識すると、自分や他者への許容が広がり、ストレスが軽減されて落ち着いた精神状態へと変化が生じていた。さらに、海外研修の体験での手応えから、自分の行動に自信が生まれて〈自己肯定感の高まり〉が生じていた。自分が想定していたよりも、自分ができるという実感が起こっていた。また、他者への否定的な考えが低減されたことで、以前よりも他者とのかわりができるようになったとする〈対人交流の広がり〉が見いだされた。自分との違いを感じる相手に対して避けようとする行動が減り、関係性を良好に変化させていた。

5. 全体のストーリーライン

本結果で得られたカテゴリーから、全体のストーリーラインを生成した。

タイでの経験は〈日本との差異を感じる体験〉として調査協力者には認知され、観察だけではなく、〈非言語コミュニケーションの体験〉を通して考察が深められ、〈体験による実感〉をもたらししていた。そういった体験学習が自身の〈日本人としての認知的枠組みの浮上〉を生じさせて、〈認知傾向に係る気づき〉や〈他者認知に係る気づき〉を促し、【認知的枠組みの見直し】となっていたことが示された。

【認知的枠組みの見直し】が起これば、調査協力者の態度や視点に変化が生じて、〈受容的意識の高まり〉を起こし、〈受容的な交流への変化〉となっていたことが示された。さらに、〈非言語コミュニケーションの体験〉で生じた〈配慮を意識したコミュニケーションへの変化〉が、察するだけではなく〈他者視点の想像〉をするように、交流の際の視点が変化していた。自分とは違う視点を持つ他者として認識するうちに、〈バウンダリーに係る気づき〉を得ていた。こうした【共感的態度やコミュニケーションスキルの形成】が【認知的枠組みの見直し】によって生じたと推察された。

一方で、〔環境や国民性の差異の体験〕から、〈タイ人に対する寛容な印象〉を持ち、〈タイ人の思考傾向に係る推察〉が起これば、理解の深まりが示された。同時に、自分の〈日本人としての認知的枠組みの浮上〉との相互作用によって、タイの人々に対する理解と日本人としての枠組みが明ら

かになるようであった。明らかになるにつれて、〈認知傾向に係る気づき〉や〈他者認知に係る気づき〉も促され、省察学習の循環が起こっていた。また、タイで様々なものに触れるうちに〈社会への問題意識〉が高まり、〈日本との比較からの考察〉によって理解が深められていた。以上のような【社会的視点の獲得】が【認知的枠組みの見直し】との相互作用から起こっていたことが見られた。

また、〈タイ人に対する寛容な印象〉や〈タイ人の思考傾向に係る推察〉によって、タイの人々に対する理解が深化すると、それをモデルとして〔受容的態度の形成〕や〔コミュニケーションスキルの向上〕が生じ、【共感的態度やコミュニケーションスキルの形成】によってさらに相手への理解が深まるといった循環が生じていた。

【環境や国民性の差異の体験】の中では、調査協力者の自己肯定感が高まり、〈主体性の高まり〉が生じていた。また、タイの対人援助職の観察や【社会的視点の獲得】から、理想とする対人援助職としての〈将来像の形成〉が起きていた。そういった変化は、同時に〈自己肯定感の高まり〉を生じさせていた。さらに、【認知的枠組みの見直し】が影響して、〈精神状態の安定〉につながっていたと推察された。加えて、〈精神状態の安定〉を基盤として、【共感的態度やコミュニケーションスキルの形成】も影響して、〈対人交流の広がり〉が見られた。

以上のことから、【認知的枠組みの見直し】が【共感的態度やコミュニケーションスキルの形成】や【社会的視点の獲得】を生じさせて、それらの相互作用によって【レディネスの向上】となったことが示唆された。

IV. 考察

1. 海外の体験学習から起こる認知的枠組みの見直し

〈日本との差異を感じる体験〉のデータで示されたように、タイで見慣れない環境や触れたことのない文化を経験すると、調査協力者は日本と比較してその意味や特徴を捉えようと試みていた。本研究におけるインタビューでは、タイでの体験学習についての感想を尋ねているにもかかわらず、必ず日本との比較によってそれが語られていた。そのため、自分の中にある日本という認知的枠組みが頭の中で想起され、自分の中へ無意識に蓄積されていた当たり前や常識、価値観といった枠組みを意識に浮き上がらせたと推察される。

〈日本人としての認知的枠組みの浮上〉で語られていたように、調査協力者は日本と違うものに反応する自分を感じて、日本人としての自分の感覚を実感し、そこから自分の過去の行動や思考を振り返り、〈認知傾向に係る気づき〉や〈他者認知に係る気づき〉を得ていたと考えられる。調査協力者は、タイでは設備が整っていなかったり、壊れていたりといったことに対して不便さを感じる体験とともに、それらを「不便」と感じる自分を省察して、「設備が整っていることが当たり前である」という感覚を持っていたことに気づいていた。

以上のような体験は、Gergen (1999) が異文化を知ることは自分の言語で解釈することになる

ため、そこには自身のあり方が反映され、自分自身を明らかにすると指摘していることと同様であると推察され、体験学習でタイの文化を理解しようとするのが、自分の持っている【認知的枠組みの見直し】になると示唆された。

さらに、タイの人々を観察し、交流をする中で、勤務態度が日本では不真面目と思われるようなものでも良いとされ、時間に対しても遅延やズレを気にせず、臨機応変に行動している様子を見て、自分の持っていた厳しい態度で物ごとに臨まねばならないという認識を見直していた。タイでの体験学習はタイの職員や利用者に合わせて行われるため、タイの時間感覚や行動規範に自分が合わせなくてはならない経験となる。調査協力者はインタビューでタイのことを「柔軟」と表現し、対する自分を「きっちり」として「日本人枠にはまっていた」という言葉で表していたが、日本とは違って予定通りにいかないことが連続する中で、最初は戸惑いを感じていたが、それでも物ごとが成立することを体感し、許容してもよいという価値感覚に変わっていくようであった。

2. 対人援助職の基盤となる態度やコミュニケーションスキルに係る学習効果

この項目では、【認知的枠組みの見直し】によって省察が促進されることによる【共感的態度やコミュニケーションスキルの形成】への影響について考察する。

〈日本人としての認知的枠組みの浮上〉で示されていたように、日本で遵守しなければならないと感じていた行動規範に対しては不寛容さを感じ、その価値観で他者を批判すべきではないという考えに至っていた。「自分の尺度」で批判していたことに気づいたことが〈他者認知に係る気づき〉で示されていたが、それとともに調査協力者自身の不寛容さが不安や焦りを引き起こし、「自分で自分の首を絞めて」いたという〈認知傾向に係る気づき〉が起こっていた。こういった見直しにより、自他への寛容な意識がもたらされて「許容範囲が広がった」と調査協力者が感じるような〈受容的意識の高まり〉が起こっていた。こういった態度は他者との交流で発揮され、他者の行動へ合わせる臨機応変さを伴った〈受容的な交流への変化〉を起こし、自他の行動に対する厳しい態度が緩和され、〔受容的態度の形成〕となっていくようであった。

一方で、〔環境や国民性の差異の体験〕は、〈配慮を意識したコミュニケーションへの変化〉を生じさせ、〈他者視点の想像〉や〈バウンダリーに係る気づき〉が起こることが示された。タイの人々との交流は、日本語が通じないため、必然的に〈非言語コミュニケーションの体験〉が中心となる。その中で、調査協力者は相手が自分の意図を汲み取ろうとしてくれる姿勢を感じて、自分自身もそのように振る舞おうという意識が芽生え、相手の動作や表情などを注意深く観察して、推察することを身につけようとしていた。これが、〈配慮を意識したコミュニケーションへの変化〉をもたらし、コミュニケーションスキルの向上を調査協力者に感じさせていた。

そのような相手の意図を推察する行為が〈他者視点の想像〉となり、相手の感覚や価値観、文化を参照して他者の行為を推察する視点に変わり、自分の認知的枠組みを超えて相手の枠組みに立って理解する態度を醸成していた。それに伴って、「自分の価値基準で他者を評価してはいけ

ない」,「他者は自分の思い通りにはならない存在である」という意識を持つ必要性を調査協力者は感じ、〈バウンダリーに係る気づき〉となっているようであった。そのような〔他者視点の獲得〕は、相手に対して受容しようとするだけでなく、相手の立場に立ち、理解しようとする共感的態度へと進化させると推測された。

澤田(1998)は、様々な研究結果から共感性の高い人格特性をまとめているが、その中には「認知的に柔軟であり」、「あいまいさへの耐性が高く」あることが示されている。タイの人々の状況に応じた臨機応変な言動は、正にあいまいさを多く含んだ状況であり、調査協力者がそれに合わせられるように認知を変化させた〔受容的態度の形成〕からは、耐性の高まりが推察された。

本データにおいて認められた受容的に他者の視点で認知しようとする態度には「認知的な柔軟性」の高まりが起こっていたと考えられる。そういった変化の契機となっていたのが、自分の【認知的枠組みの見直し】であったが、Combs・Avila・Purkey(1978)が「物事の見え方は各個人にとって、完全な現実感を持っているので、それに疑問を抱くことはめったにない」と指摘しているように、日常生活や通常教育課程の中ではこのような【認知的枠組みの見直し】を起こすことは困難であり、無意識にあるものを認識させることは殊更に難しい。見直す前段階としては一旦自分の認知的枠組みを意識に浮上させることを必要とするが、海外での〔環境や国民性の差異の体験〕はそれを無理なく起こしていた。これによって、省察学習が促進され、【共感的態度やコミュニケーションスキルの形成】へとつながっていたと考えられ、対人援助職の学習として貴重な効果があることが示唆された。

3. 社会的視点に係る学習効果

ここでは、【認知的枠組みの見直し】からの【社会的視点に係る学習効果】への影響について着目する。

体験学習では、〔環境や国民性の差異の体験〕を重ねるたびに、出会った個人に対する理解だけでなく、全体的な理解としてタイの〔文化や国民性に対する理解の深化〕となっていた。行動や表情などから、〈タイ人に対する寛容な印象〉を感じ、それがどのような背景から形作られているのかといったことについても、観察した景色や生活、話の内容から宗教や家族観を捉えて、〈タイ人の思考傾向に係る推察〉となっていた。「なんでもいいよ」というタイの人々の寛容な考え方が、物ごとへの「適当」な柔軟性を生み出し、それが現実的な対処となっていると調査協力者は考えていた。そういった寛容さは、差別なく接することができる友好的な態度となっていると調査協力者には捉えられ、概ね好印象となっていた。以上のことから、〔環境や国民性の差異の体験〕から〈タイ人に対する寛容な印象〉を感じているうちに、〈タイ人の思考傾向に係る推察〉が生じて〔文化や国民性に対する理解の深化〕となっていることが本データから推察された。

しかし、同時に、タイの〈社会への問題意識〉や〈日本との比較からの考察〉といった批判的な意識が起こっていることも示された。〈社会への問題意識〉に示されたように、調査協力者は

タイの文化や国民性が良いと感じる一方で、タイの社会が抱える深刻な問題を見て、貧困や無国籍の人の存在、人権の課題を感じ、現実を突きつけられて「考えさせられた」と語っていた。インタビューで「日本でいう心理的虐待とかにはならないのか」と語られたように、これも〈日本との比較からの考察〉によって理解は深められていた。

体験学習では医療機関や福祉施設へ訪問するため、タイ社会が抱える問題に触れる機会が多く〈体験による実感〉が起こり、〔社会問題への関心が高まる〕ような刺激を受けると推察された。〈社会への問題意識〉のデータにある「どういう心境に立たされるんだろうか」や「患者さんのことを想像せずにいられない」という語りが示すように、社会の抱える課題によって弱い立場に立たされる人の心情を想像しており、〈他者視点の想像〉をしようとする共感的態度の形成が関心をより高まらせていたと考えられる。調査協力者はこのような問題意識をもって、人々を改めて観察すると、「どうしてこんなに若くしてここでお店を開いているんだろう」と語っていたように、個人の背景についても思考が及び、「日本と違う歴史をたどっているからこそ、そういう問題が起きている」などと社会的視点による分析が生じていた。以上のことから、現在の目に見える範囲だけではなく、歴史や文化といった社会的背景にも目を向けることにつながっていったと考えられ、【社会的視点に係る学習効果】が得られたと推察された。

Gergen (1999) が、人は「人々との関係、仕事、物理的な環境などの中に深く織り込まれ」としていると指摘しているように、人は社会との相互作用で存在しているため、人を理解するためには社会的視点は欠かすことができない。そのため、対人援助職の基盤となるものとして、生物-心理-社会モデルをはじめとする多角的な視点が必要であることは共通して教育がなされているが、調査協力者が「宗教について切り離して考えていた」、「文化的な背景について考えたことがなかった」と語っていたように、日本で生活する中では歴史や文化、宗教といった社会的背景について考える機会が少なく、想像することすら難しいものであると考えられる。そのため、座学ではそのような視点を知識として得ることはできても、実践できるレベルの習得は学生にとって得難いものであろう。それに対して、タイの社会問題を「考えさせられる」体験は、この視点を得るための貴重な機会となることが推察された。

4. 学習を促進するレディネスとなる効果

【レディネスの向上】は【認知的枠組みの見直し】から起こると思われたが、本研究の結果では、【共感的態度やコミュニケーションスキルの形成】や【社会的視点の獲得】も影響していることが推察された。

〔環境や国民性の差異の体験〕の中では、調査協力者が想定していたよりも適応できていた自分を振り返り、体験前は「不安が先行していた」という〔自分の行動や思考の見直し〕から一転して「案外大丈夫」と実感し、〈自己肯定感の高まり〉が起こっていたことが示されていた。すぐに適応できないことも、うまくできないことも経験されていたが、どうにかしなければ「焦りすぎて

いた」自分から、「ここまでできたらいいや」という考え方へ変わり、〈精神状態の安定〉となっている様子が見られた。そのような精神状態の変化は、「動けば変わる」と語られていたように、自己効力感となって〈主体性の高まり〉が生じ、自分から積極的に行動を起こしてみようというモチベーションになっていたと推察された。一方で、〈精神状態の安定〉での語りに、自分の目標設定を「適当にした」や「緩やかにできた」とあることから、行動の結果について高い目標を立てなくてもよいと考えられるように変化したことも、「行動を起こしてみよう」という意識に作用していると思われる。

その背景には、〈タイ人に対する寛容な印象〉で語られていた「ゆとり」が影響しているものと推察された。タイの人々の「ゆとり」が、〈精神状態の安定〉に示される調査協力者の「ゆとり」を持つとする意識や態度へ影響したと考えられ、タイの人々の「ゆとり」をモデルとして自分の思考へ取り入れようとする心の動きが起こったものと推察された。そのような積極性とゆとりのある姿勢が〈対人交流の広がり〉となって、調査協力者に自分の変化を実感させていた。体験学習前は避けていたような人に対しても〈対人交流の広がり〉がみられたが、「当たり前を受け入れられるようになった」という語りができるように、【共感的態度やコミュニケーションスキルの形成】によって、対人関係の構築に必要な態度やスキルの向上があったことが、無理のない〈対人交流の広がり〉につながったと考えられる。このような本研究のデータから、タイでの体験がスキルや視点を鍛えるだけではなく、学びを促進させる【レディネスの向上】を生み出していたことが推察される。

〈対人交流の広がり〉に見られる体験学習後の対人交流に関する語りからは、〔他者視点の獲得〕がなされているため、苦手だと感じていた相手を理解できることが増え、「避けるようなことはなく」なり、交流が広がっていると推察された。このような態度は、ロジャースが提唱した「無条件の積極的関心」という対人援助職の基盤となる条件（坂中2015）と類似しており、その獲得に向けた【レディネスの向上】となる可能性が示唆された。

また、〈将来像の形成〉では、社会問題や他者に対する認知や態度を調査協力者が考察するうちに、対人援助職としてのあり方についても考えが深まり、自分の理想とすることが語られていた。援助関係や社会、制度といった実践に関わるものについて【社会的視点の獲得】で深まった理解から、自分であれば将来どのようにすべきか想像を膨らませ、その後の学習へのモチベーションとなることが推察された。こうした〔モチベーションの向上〕や〔精神的なゆとりの高まり〕は専門職としての自己を形作るうえで欠かせないものである。Combs・Avila・Purkey（1978）が対人援助職の必要条件として、現実を肯定的に受け入れる「経験に対する開放性」を備えていることを挙げているが⁴⁾、今回見いだされた変化はこれに寄与するものであると考えられる。

以上のように認知や態度、コミュニケーションスキルの変化が見られたが、すべての契機となったのは、日常では感じることの無い異文化を観たときの違和感であった。それが自己理解を促進し、様々な変化をもたらしていた。対人援助職の実践には自己を通して表現することが欠かせな

いため、道具となる自己を磨く必要があるが、座学や学内の演習では知識や技術を得ることはできて、自己の変容までを起こすことは困難であると思われる。そのため、海外の体験学習で異文化と接することは、対人援助職となるための自己を見直し、必要な態度やスキルを形成する貴重な機会となることが、本研究の結果から示されたと言えよう。

V. 今後の課題と本研究の限界

他者に対して積極的に関与しようとする姿勢へと変化した内容が多く語られたが、調査協力者がタイに関して考察した内容は疑問が残るものも見られた。自分が接した時間だけを切り取り「ポジティブな感情になれない」人として相手を捉えたり、子どもは「みんな素直」と一様に捉えたりするなど、修正を必要とするのではないかと思われるものも見受けられた。社会問題についても、「無国籍の問題は日本にはない」と捉えているなど、現実と照らし合わせてさらに学習を要すると思われるものもあった。これらに対しては、体験学習後の座学や学内の演習、現場実習とどのように関連付けて学びを深められるかといった課題があると思われる。

また、本研究では、本人が感じる自分の変化や学習効果についての語りを分析したため、主観的な変化であり、周囲からの変化についての客観的な評価は対象としていない。そのため、実際の調査協力者の態度やスキルとは異なる可能性がある。また、体験学習直後のみインタビュー調査を行ったため、通常教育課程に戻ってからの変化については考慮されていない。従って、これらの観点からも今後は効果を実証する必要があると考えられる。

注

- 1) Combs・Avila・Purkey(1978)は、援助に対人援助職の自己の効果的な使用が必要であることを指摘し、対人援助職の個人の認識によっても援助の質が左右されるとしている。
- 2) 三國・本山・坂中(2015)は、ロジャースの提唱したカウンセラーの態度として、「一致」、「無条件の積極的理解」、「共感的理解」を挙げ、対人援助職に共通して必要な態度条件であると指摘し、「共感的理解」について、「クライアントを『理解』しようとする姿勢」としている。
- 3) Turner(2000)は、人が特定の状況下で生きていくために知識を貯蔵し、それを参照して思考し、行動の決定をすることを指摘し、知識は文化や社会構造、対人関係によって生成されるとしている。
- 4) Combs・Avila・Purkey(1978)は対人援助職には自己実現をある程度達成している必要があると論じ、そのような人物には「経験による開放性」があるとしている。「経験による開放性」とは「自己においてであれ外界においてであれ、現にあるものに直面する能力」であり、クライアントを支える態度となるとしている。

引用文献

- Combs, A. W., Avila, D. L. and Purkey, W. W.(1978). *Helping Relationships: Basic Concepts for the Helping Professions*. Allyn & Bacon, Inc.(コムズ, A.W.・アヴィラ, D.L.・パーケイ, W.W. 大沢博・菅原由美子(監訳) (1985). 援助関係—援助専門職のための基本概念 プレーン出版)
- Engel, G. L.(1977). The Need for a New Medical Model: A Challenge for Biomedicine, *Science*. 196, 129-136.
- Gergen, K.(1999). *An Invitation to Social Construction*, Sage Publications.(ガーゲン, K. 東村知子(監訳) (2004).

あなたへの社会構成主義 ナカニシヤ出版)

岩壁茂(2017). 生物—心理—社会モデル 臨床心理学-必携保存版 臨床心理学実践ガイド17(4) 金剛出版. pp.544-545.

柏木一恵(2019). これからの精神保健福祉士には何が求められるのか 月刊福祉11. pp.29-33.

日本心理学会(2018). 公認心理師大学カリキュラム 標準シラバス(https://psych.or.jp/wp-content/uploads/2018/04/standard_syllabus_2018-8-22.pdf 2020.7.19).

三國牧子・本山智敬・坂中正義(2015). ロジャースの中核三条件-受容:無条件の積極的関心 創元社

村田晶子(2018). 大学における多文化体験学習への調整-国内と海外を結ぶ体験的学びの可視化を支援する ナカニシヤ出版

大谷尚(2007). 4ステップコーディングによる質的データ分析手法SCATの提案-着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要54(2). pp.27-44.

坂本真理子・富田輝司(1997). 異文化との接触に基盤をおいた体験学習の効果 愛知県立看護大学紀要3. pp.47-53.

坂中正義(2015). 無条件の積極的関心とは. In 三國牧子・本山智敬・坂中正義(編)ロジャースの中核三条件-受容:無条件の積極的関心 創元社. pp.4-20.

澤田瑞也(1998). カウンセリングと共感 世界思想社

白澤政和・田村綾子・岡田まり・原田正樹(2019). 社会福祉士・精神保健福祉士養成課程の見直しとこれからのソーシャルワーカーに求められるものとは 月刊福祉11. pp.14-23.

Turner, J. H.(2000). *On The Origins of Human Emotions: A Sociological Inquiry into the Evolution of Human Affect*, Stanford University.(ターナー J.H. 正岡寛司監(訳)(2007). 感情の起源—自律と連帯の緊張関係 明石書店)

結城俊哉(2013). ケアのフォークローア—対人援助の基本原則と展開方法を考える 高学出版

脚注)本研究の一部は、2020年に第23回日本学校メンタルヘルス学会にて「海外の福祉施設の体験学習による学生の対人認知の変容」という題目で発表を行った。

Significance and problems with practice at social welfare facilities abroad
in Human Service Professional Education :

Learning Basic attitude, Communication skills and Social perspective

Yuko NAKAMURA, Tomoyasu SANO, Hidetoshi OMIYA

Abstract

In this study, we aimed at validating the educational effects by practicing at social welfare facilities abroad. We examined if the practice has effects for attitude, communication skills and fostering social perspective that become the basics of Human service professional. We interviewed the 12 students who participated in the practice in Thailand and tried the qualitative analyses by SCAT. As a result, we learned that they have revised their Cognitive frame while they were learning different culture and national identity, their reflection was developed and it led to the improvement of receptive attitude, better communication skills and the Social perspective. Furthermore, their motivation for leaning and activities grew and it led to the stability of mental condition, which means it increased their readiness for learning.

Keywords: Certified Public Psychologist, Social Worker, Overseas Training and Education

（なかむら ゆうこ 札幌学院大学人文学部 人間科学科）

（さの ともやす 札幌学院大学心理学部 臨床心理学科）

（おおみや ひでとし 札幌学院大学心理学部 臨床心理学科）